

Title	福岡市方言のアスペクトマーカにみられる言語変化
Author(s)	平塚, 雄亮
Citation	阪大日本語研究. 24 P.55-P.74
Issue Date	2012-02
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4614
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

福岡市方言のアスペクトマーカにみられる言語変化

Language change in Fukuoka dialect:
With a special focus on the aspect markers

平塚 雄亮
HIRATSUKA Yusuke

キーワード：福岡市方言、アスペクト、言語変化、否定

要旨

本稿では、自然談話資料を用い、福岡市方言のアスペクトマーカにみられる言語変化について論じた。そのなかで、肯定形では伝統方言形ヨル・トルの使用が多いものの、高年層から若年層にかけて非伝統方言形テルも使用が多くなり、否定形では若年層において非伝統方言形テナイ専用へと変わりつつあることがわかった。後者の変化についてはすでに先行研究の指摘があったが、このような変化が引き起こされた要因として、本稿では、①肯定形に比べ否定形の使用が圧倒的に少ないこと、②テナイがトランの意味領域に侵入し、取って代わるという変化が起き、さらにヨル／トルの意味対立がなくなってきたところに、両者をカバーする存在としてテナイが現れたこと、の2点を指摘した。

1. はじめに

本稿では、福岡市方言のアスペクトマーカを対象に、そこにみられる言語変化について論じる。具体的には、高年層では使用のみられるヨル・トルの否定形ヨラン・トランが若年層では用いられなくなり、テナイという非伝統方言形専用になりつつあるという変化についての考察を行うものである。

以下、2節で方言のアスペクトマーカの変化についての先行研究をまとめ、3節で調査概要について説明する。4節では調査結果を提示し、それをもとに5節で考察を行う。6節はまとめと今後の課題である。

2. 先行研究

ここではまず、2.1節で福岡市方言のヨル・トルについて木部(2004)を参考に簡単にまとめる。また、方言のアスペクトマーカの変化について述べたものについて、2.2節で本稿が対

象とする福岡市方言についての先行研究を、2.3節で他方言を対象にした先行研究をまとめる。

2.1. 福岡市方言のヨル・トル

ここで、木部（2004）を参考にしつつ、福岡市方言のアスペクトマーカ「ヨル」「トル」について、本稿の議論にかかわる部分だけを簡単に説明しておく。

福岡市方言にはヨル・トルというアスペクトマーカがあり¹⁾、前者が用いられると例文（1）のように動作継続を、後者が用いられると例文（2）のように結果継続を表す。

(1) (今, 目の前で) 先生がビールを飲みヨル。 <動作継続>

(2) (顔が赤くなっているのをみて) 先生がビールを飲んどル。 <結果継続>

ただし、2.3.2節でも述べるが、福岡市方言においても若年層を中心に、トルで動作継続を表すことができる話者も多くある。これにより、

(1') (今, 目の前で) 先生がビールを飲んどル。 <動作継続>

のように、動作継続を表すことができるようになっている。

このほかに、ヨルは例文（3）のような反復習慣を表すこともある。トルは例文（4）のように経験を表すこともある。

(3) 太郎は毎朝 15 分本を読みヨル。 <反復習慣>

(4) 太郎は今までに 100 冊以上本を讀んどル。 <経験>

その他周辺の意味については、木部（2004）や平塚（2008）などを参考にされたい。

2.2. 福岡市方言のアスペクトの変化を対象にした先行研究

本稿で取り上げる福岡市方言のアスペクトマーカの変化については、すでに二階堂（2006）の指摘がある²⁾。二階堂（2006）は、福岡市方言話者の自然談話資料をもとに、若年層を中心に、否定形にヨラン・トランが現れるのが非常にまれであることを示している。それぞれのインフォーマントの生年は不明であるが、20歳と21歳の女子大生の談話Aに「別メニューしヨランかった」の1例が、20歳と21歳の女子大生の談話B・Cのうち、Cの談話に「間違っトラン」「離れトラン」の2例がみられるのみで、談話Bと、49歳と51歳の女性の談話Dには、

ヨラン・トランの用例がみられないという。このように否定形として伝統方言形ヨラン・トランが用いられず、非伝統方言形テナイが用いられることについて、「否定の場面においては、ヨル・トルの区別が重要でなくなる（否定であるから）」という考察を行っているが、なぜそう考えられるのかが説明されていない点に問題がある。

また、二階堂（2006）は80歳男性と77歳女性の談話Eにおけるアスペクトも観察している。しかしながら、この談話には二階堂氏本人も同席しているところに問題がないとはいえない。ある箇所では「福岡の高年層ではよそゆきの場面でも、方言を使用するのが特徴であり、今回のヨル・トル使用調査という目的においては、大きな問題はないと考えられる（P.61）」としながら、別の箇所では「（テル・テナイの）使用数が多いが、これは、調査者が同席したため、調査者へ話しかける・聞かせる場面があり、その際に出てくるが多かったので、例外としてあつかう（P.65）」と、同席したことが問題であったかのような記述がみられる。このようなことから、高年層の実態についてはまだ正確にわかっているとはいえ、再検討する必要がある。ただし、中年層の談話D（49歳と51歳の女性）にもヨラン・トランが用いられないという指摘は、中年層ですでに変化が認められるという点で注目すべき事実である³⁾。

2.3. 他方言のアスペクトの変化を対象にした先行研究

他方言のアスペクトの変化について述べたものとしては、津田（2008）や、工藤（2000；2004）がある。以下、それぞれについて2.3.1節、2.3.2節でまとめる。

2.3.1. 津田（2008）

まず、本稿で指摘するものと同じ現象が観察される徳島方言を取り上げた津田（2008）の記述をまとめる。津田（2008）も二階堂（2006）と同様に、自然談話資料を用いて否定形に注目し、その使用実態を記述したものである。福岡市方言と同様に、徳島方言においても、ヨル・トルの否定形であるヨラン・トランが用いられなくなり、非伝統方言形のテナイ専用へと変化しつつあるという。その原因として、「標準語のテナイを受容したこと」と、「形容詞ナイであること」の2つの可能性をあげている。前者については、テナイにナイという要素が含まれる一方、当該方言の動詞の否定辞は若年層においてもンが主流であることから、津田氏自身も否定的な態度をとっている。ただし、テナイはアスペクトを表す接辞であり、ふつうの動詞とは違うので、単純に動詞の否定辞と比較することでこれを否定することは適切ではないと考えられる⁴⁾。形態的にみても、アスペクトマーカに含まれる存在動詞がオルからイルへと変化しており、単に否定辞だけの問題では片づけられない。後者については、存在動詞アルに対する形容詞ナイである可能性を指摘しているが、その詳細については記述がなく不明である。このように、二階

堂（2006）と同様の結果を徳島方言においても得ているものの、やはりこのような言語変化に対する説明が不十分であると言わざるをえない。

2.3.2. 工藤（2000；2004）

津田（2008）のほか、アスペクトを表す形式の変化について、五所川原方言と南陽方言を取り上げた工藤（2000）がある。工藤（2000）は、五所川原方言話者と南陽方言話者に対して面接調査を行い、肯否両方のアスペクト・テンス体系を記述したものである。そのなかで、どちらの方言においても肯定形より否定形の方が変化を先導しているという指摘を行っており、「時間的意味の表現が肯定にくらべて重要性をもたない否定形式において先行する」という考察を加えているところが注目に値する。この点については、2.2節でまとめた二階堂（2006）も同様の考え方をとっていることになるが、やはりなぜ否定において重要性をもたないのかについては説明がないところに問題がある。

また工藤（2004）では、ヨル・トルの区別をもつ西日本諸方言において、ヨルが表していた動作継続や反復習慣の意味を、トルが表すようになるという変化が起こっていることも指摘している（本稿が対象とする福岡市方言も例外ではない）。このような変化は、主体動作動詞⁵⁾において最も顕著で、続いて主体動作客体変化動詞⁶⁾に起こりやすく、主体変化動詞⁷⁾では起こらないとされる。しかしながら、このような変化がはたして肯定形において先に起こったのか、否定形において先に起こったのか、それとも肯否にかかわらず同時期に起こったのかはわかっていないようである。

3. 調査概要

本稿では、できるだけ実際の言語使用状況を写しとることを目的としているため、アンケートなどで言語使用意識を問うことでデータとするのではなく、筆者の収集した自然談話資料（以下「談話」）を用いて分析を行うことにする。談話は高年層によるもの、若年層によるものをそれぞれ収録し、2つの離れた世代のデータを比較することで、今日の前で起こっている変化とはどういったものであるのかという点について具体的に明らかにしていく。

談話の収録は2008年から2010年にかけてすべて福岡市内で行った。高年層の談話はインフォーマント20名（男性10名、女性10名）による10本（表1参照）、若年層の談話はインフォーマント18名（男性9名、女性9名）による10本である（表2参照）。若年層の談話のうち、FUYは若01Mと若02Mの2つの談話に、YONは若06Fと若07Fの2つの談話に参加しているが、これはそれぞれの話し相手（若01MのHASと若02MのMAG、若

06F の INM と若 07F の GOA) が親しく会話ができる相手として FUY と YON を選んだためである。

インフォーマントの選定にあたっては、以下のような条件を設けた。

- (5) 高年層：談話の収録年である 2010 年の時点で 65 歳以上であること、つまり、1945 年以前の生まれであり、調査時に福岡市に居住していること。福岡市外での居住歴については、おおむね通算 10 年程度以内であること。
- (6) 若年層：談話の収録開始年である 2008 年の時点で 18 ～ 25 歳であること、つまり、1982 ～ 1990 年生まれであり、調査時に福岡市に居住していること。18 歳までの福岡市外での居住歴については、おおむね通算 5 年程度以内であること。

12 歳までのいわゆる言語形成期については、約半分の期間福岡市に居住していれば条件を満たすものとした。以上のような条件のもとにインフォーマントを選定し、カジュアルな話ができる親しい同性で話し相手を探してもらい、ペア（2 人）で話をしていただいた。談話収録中は筆者は同席せず、公民館や大学の空き教室などの部屋で、それぞれ 30 分以上 IC レコーダで談話を録音した。そのうち、談話の冒頭部分は緊張するなどして不自然な発話が見られることもあったため、筆者の判断でインフォーマントが録音を意識しなくなった部分から分析の対象とした（よって、談話によって分析対象となる時間に差が生じた）。話題はこちらからは特に指定せず、自由に会話を行ってもらっており、談話収録後にはそれぞれのインフォーマントからデータの使用許可をいただいた。すべての談話のうち本研究で分析対象とした部分の合計時間は、高年層が 7 時間 38 分 44 秒、若年層が 6 時間 35 分である。

表1 【高年層】談話情報とインフォーマントの属性

談話ID	収録年	談話時間	話者ID	生年（調査時年齢）	居住歴
高01M	2010	56分40秒	TAS	1937（72歳）	0- 福岡県福岡市
			MAH	1938（72歳）	0-22 福岡県福岡市 22-27 大阪府大阪市 27- 福岡県福岡市
高02M	2010	49分39秒	HIT	1939（70歳）	0-4 福岡県福岡市 4-6 福岡県二日市市 6- 福岡県福岡市
			UET	1942（67歳）	0-7 福岡県北九州市 7-30 福岡県福岡市 30-34 アメリカ 34- 福岡県福岡市
高03M	2010	40分39秒	HAM	1942（68歳）	0-30 福岡県福岡市 30-33 大阪府高槻市 33- 福岡県福岡市
			NAH	1930（80歳）	0- 福岡県福岡市
高04M	2010	43分8秒	SHT	1940（69歳）	0- 福岡県福岡市
			HAK	1939（71歳）	0-6 福岡県福岡市 6-7 福岡県宗像市 7- 福岡県福岡市
高05M	2010	42分51秒	MIK	1939（71歳）	0-22 福岡県福岡市 22-24 東京都 24- 福岡県福岡市
			KAK	1939（71歳）	0-18 福岡県福岡市 18-22 京都府 22-23 大阪府 23- 福岡県福岡市
高06F	2010	63分37秒	YAC	1932（78歳）	0- 福岡県福岡市
			SUC	1940（70歳）	0- 福岡県福岡市
高07F	2010	36分25秒	MAM	1939（70歳）	0- 福岡県福岡市
			AOK	1939（71歳）	0- 福岡県福岡市
高08F	2010	37分5秒	OSH	1934（75歳）	0- 福岡県福岡市
			ICY	1935（75歳）	0- 福岡県福岡市
高09F	2010	42分15秒	OTK	1944（65歳）	0- 福岡県福岡市
			HIS	1945（65歳）	0- 福岡県福岡市
高10F	2010	46分25秒	NAY	1939（71歳）	0- 福岡県福岡市
			MIC	1944（66歳）	0- 福岡県福岡市

表2 【若年層】 談話情報とインフォーマントの属性

談話ID	収録年	談話時間	話者ID	生年 (調査時年齢)	居住歴
若01M	2008	43分28秒	HAS	1982 (25歳)	0-1 三重県四日市市 2-3 東京都 3-18 福岡県福岡市 18-20 東京都府中市 20-21 イギリス 22-23 東京都国分寺市 24- 福岡県福岡市
			FUY	1982 (25歳)	0- 福岡県福岡市
若02M	2008	31分21秒	MAG	1982 (25歳)	0-6 長崎県 6-18 福岡県福岡市 18-23 千葉県市川市 23- 福岡県福岡市
			FUY	1982 (25歳)	0- 福岡県福岡市
若03M	2010	41分38秒	TOY	1986 (23歳)	0- 福岡県福岡市
			UJK	1986 (23歳)	0- 福岡県福岡市
若04M	2010	39分15秒	OTT	1988 (22歳)	0- 福岡県福岡市
			MIT	1988 (22歳)	0- 福岡県福岡市
若05M	2010	40分23秒	ENT	1985 (25歳)	0- 福岡県福岡市
			NAT	1985 (25歳)	0- 福岡県福岡市
若06F	2008	52分36秒	INM	1982 (25歳)	0- 福岡県福岡市
			YON	1982 (25歳)	0- 福岡県福岡市
若07F	2008	49分49秒	GOA	1982 (25歳)	0- 福岡県福岡市
			YON	1982 (25歳)	0- 福岡県福岡市
若08F	2009	26分5秒	FUN	1986 (22歳)	0- 福岡県福岡市
			HAN	1986 (22歳)	0-1 福岡県福岡市 1-2 埼玉県 3- 福岡県福岡市
若09F	2010	34分43秒	TAM	1989 (20歳)	0- 福岡県福岡市
			UCA	1989 (20歳)	0-7 福岡県福岡市 8-11 福岡県宗像市 12-14 熊本県熊本市 15- 福岡県福岡市
若10F	2010	35分42秒	NOS	1989 (21歳)	0- 福岡県福岡市
			IZS	1990 (20歳)	0- 福岡県福岡市

用例の収集にあたっては、丁寧体であった発話については分析の対象とせず、より方言形の出現しやすい普通体のみにしぼった。また、別の発話の引用である場合には、自身の発話ではないと考えたため除外することにした(話し手自身の発話の引用であっても除外)。また、高年層では【高01M】TAS:クーラーやら当たりゴザー人はあげんして外出とったらもうやっぱ、だめ。」のように、ゴザル(ゴザー)という敬意を含んだアスペクトマーカも用いられるが(26例あった)、若年層では使用例がなく、本稿では分析の対象から外した。また、高06FのYACにチョルの使用がみられたが、これについては用例数が3例と少なかったため、分析は行わずに保留している。

4. 調査結果

すべての談話で得られたアスペクトマーカは、高年層が合計 1,400 例、若年層が合計 882 例あった。以下、4.1 節で本稿で特に注目する否定の場合について、4.2 節ではその比較対象となる肯定の場合についての調査結果を示す。

4.1. 否定の場合

まず、本稿の議論の中心となる否定の場合について、表 3 で高年層⁸⁾の、表 4 で若年層のデータを示す。

表 3 (高年層) の「ヨラン」には、ヨラン (8 例) のほかに、ヨランヤッタラ (1 例)、ヨランヤッタ (13 例)、ヨンシャラン (1 例) を含む⁹⁾。「トラン」には、トラン (72 例) のほかに、トランヤッタ (1 例) を含む。「テナイ」には、テ (イ) ナイ (26 例) のほかに、テ (イ) ナカッテ (1 例)、テ (イ) ナカロ (一) (1 例)、テ (イ) ナカッタ (5 例) を含む。

表 4 (若年層) の「ヨラン」には、ヨラン (2 例) のほかに、ヨランヤッタ (1 例)、ヨランカッタ (3 例) を含む。「トラン」は、すべてトラン (7 例) である。「テナイ」は、テ (イ) ナイ (94 例) のほかに、テ (イ) ナクテ (1 例)、テ (イ) ナカロ (一) (2 例)、テ (イ) ナカッタ (14 例) を含む。

本来であれば、それぞれのアスペクトマーカに後接する接辞・接語が変化のあり方を制約するか否かを論じる必要があるが、今回はそれぞれの用例数の少なさから、単に「否定」という意味でまとめて議論することにする。

表3 【高年層】アスペクトマーカ（否定）の用例数

談話ID	話者ID	ヨラン	トラン	テナイ	合計
高01M	TAS	0	0	1	1
	MAH	3	4	0	7
高02M	HIT	6	2	0	8
	JET	1	4	0	5
高03M	HAM	0	1	2	3
	NAH	0	4	0	4
高04M	SHT	2	1	5	8
	HAK	0	2	5	7
高05M	MIK	2	4	1	7
	KAK	0	0	2	2
高06F	YAC	4	4	2	10
	SUC	2	4	4	10
高07F	MAM	0	0	4	4
	AOK	0	3	1	4
高08F	OSH	0	9	2	11
	ICY	0	3	3	6
高09F	OTK	0	5	0	5
	HIS	0	9	1	10
高10F	NAY	0	1	0	1
	MIC	3	13	0	16
合計		23	73	33	129

表4 【若年層】アスペクトマーカ（否定）の用例数

談話ID	話者ID	ヨラン	トラン	テナイ	合計
若01M	HAS	0	0	3	3
	FUY	0	0	2	2
若02M	MAG	0	0	6	6
	FUY	0	0	2	2
若03M	TOY	0	0	8	8
	UJK	0	2	7	9
若04M	OTT	1	0	3	4
	MIT	1	0	4	5
若05M	ENT	0	1	4	5
	NAT	0	0	1	1
若06F	INM	0	0	13	13
	YON	0	0	9	9
若07F	GOA	0	0	8	8
	YON	0	0	6	6
若08F	FUN	0	0	6	6
	HAN	1	0	4	5
若09F	TAM	0	2	6	8
	UCA	2	2	9	13
若10F	NOS	1	0	6	7
	IZS	0	0	4	4
合計		6	7	111	124

表3から、高年層では、ヨラン（例文（7），（8））・トラン（例文（9），（10））という伝統方言形が使用されているものの、非伝統方言形テナイ（例文（11），（12））の使用が目立っていることがわかる。単純に用例数だけを比較しても、ヨランよりもテナイの方が多くなっている。

(7) 【高04M】SHT：配達きよろう？きヨラン？

(8) 【高06F】YAC：記録ちゅーと、じぇんじぇんしヨランめーが。

（以上，ヨラン）

(9) 【高02M】HIT：その、行っトランとこば、あれが不思議に行きたかもんやけんくさ、見トランとこば見ろうと思うてから。

(10) 【高07F】AOK：家に当たっトランけんうちんがたは燃えトランヤッタ。

（以上，トラン）

(11) 【高01M】TAS：小学校上がった頃は、勉強てほとんどしテナイな。

(12) 【高04M】HAK：それがね、若いときからあの人山笠に出テナカローが。

（以上，テナイ）

また表4から、若年層ではヨランが6例（例文（13），（14）），トランが7例（例文（15），（16））しかみられず、テナイ（例文（17），（18））専用になりつつあることが指摘できる。

(13) 【若04M】MIT：こんなことしヨランカッタやろ？

(14) 【若09F】UCA：夏休み取るとか言いヨランヤッタ？あの人。

（以上，ヨラン）

(15) 【若03M】UJK：高校んときまだ、まだはげトラン。

(16) 【若09F】UCA：眠いと、今日。3時間しか寝トラン。

（以上，トラン）

(17) 【若03M】UJK：お茶代とかとられよろ？とられテナイ？

(18) 【若07F】YON：きつかろうけどー、向いテナイことはないと思うもん。

（以上，テナイ）

若年層においてテナイ専用になるという変化については、すでに二階堂（2006）の指摘があったが、本稿の調査結果からそれがはっきりとした用例数の違いとして表れていることがわかった。また、2.3.1節で述べた徳島方言（津田2008）とも同じ変化が起こっているといえる。

4.2. 肯定の場合

続いて肯定の場合について、4.1 節で述べた否定の場合との比較を行うために示しておく。表5で高年層の、表6で若年層のデータを示す。

表5(高年層)の「ヨル」には、ヨル(ヨー)(226例)のほかに、ヨッテ(10例)、ヨロ(一)(12例)、ヨッタッチャ(1例)、ヨッタラ(35例)、ヨッタ(330例)、ヨッタロ(一)(18例)、ヨレバ(1例)、ヨラッシャル(ヨラッシャー)(1例)、ヨラッシャッタ(1例)、ヨンシャル(ヨンシャー)(15例)、ヨンシャッタ(13例)、ヨンナル(ヨンナー)(2例)、ヨннаッタ(4例)を含む¹⁰⁾。「トル」には、トル(トー)(407例)のほかに、トッテ(17例)、トロ(一)(16例)、トッタラ(16例)、トッタ(73例)、トッタロ(一)(1例)、トンシャル(トンシャー)(10例)、トンシャッテ(1例)、トンシャロー(1例)、トンシャッタ(7例)を含む¹¹⁾。「テル」には、テ(イ)ル(21例)のほかに、テ(イ)タ(3例)を含む。

表6(若年層)の「ヨル」には、ヨル(ヨー)(83例)のほかに、ヨロ(一)(2例)、ヨッテ(52例)、ヨッタラ(12例)、ヨッタ(156例)を含む¹⁰⁾。「トル」には、トル(トー)(243例)のほかに、トッテ(40例)、トロ(一)(2例)、トッタラ(12例)、トッタ(94例)、トンシャル(トンシャー)(1例)、トンシャッタ(1例)を含む。「テル」には、テ(イ)ル(41例)のほかに、テ(イ)テ(1例)、テ(イ)タ(18例)を含む。

4.1 節と同様の理由で、それぞれのアスペクトマーカに後接する接辞・接語がアスペクトマーカを制約するか否かは分析を保留し、「肯定」という意味でまとめて議論することにする。

表5 【高年層】アスペクトマーカ（肯定）の用例数

談話ID	話者ID	ヨル	トル	テル	合計
高01M	TAS	36	23	0	59
	MAH	85	60	0	145
高02M	HIT	39	29	3	71
	UET	18	17	9	44
高03M	HAM	1	2	0	3
	NAH	23	19	0	42
高04M	SHT	46	27	0	73
	HAK	34	25	0	59
高05M	MIK	45	35	0	80
	KAK	20	20	1	41
高06F	YAC	64	51	0	115
	SUC	20	16	3	39
高07F	MAM	19	19	5	43
	AOK	45	35	0	80
高08F	OSH	20	19	0	39
	ICY	24	21	0	45
高09F	OTK	45	23	0	68
	HIS	40	40	0	80
高10F	NAY	16	27	0	43
	MIC	29	41	3	73
合計		669	549	24	1242

表6 【若年層】アスペクトマーカ（肯定）の用例数

談話ID	話者ID	ヨル	トル	テル	合計
若01M	HAS	6	13	2	21
	FUY	6	14	0	20
若02M	MAG	4	9	0	13
	FUY	5	4	0	9
若03M	TOY	24	12	21	57
	UJK	28	22	1	51
若04M	OTT	19	16	0	35
	MIT	11	16	0	27
若05M	ENT	16	31	0	47
	NAT	5	9	2	16
若06F	INM	13	28	6	47
	YON	14	17	5	36
若07F	GOA	32	42	5	79
	YON	16	38	1	55
若08F	FUN	4	8	13	25
	HAN	16	20	0	36
若09F	TAM	27	16	2	45
	UCA	27	38	1	66
若10F	NOS	20	21	0	41
	IZS	12	19	1	32
合計		305	393	60	758

表 5, 表 6 から, 高年層, 若年層においてヨル (例文 (19), (20), (21), (22)) もトル (例文 (23), (24), (25), (26)) もよく使われていることがわかる。

(19) 【高 02M】 HIT:「行きなざっせー」とか「きなざっせー」とか言いヨッタばってんね, そげんとも使わんごとなっしまいヨル。

(20) 【高 10F】 MIC:それで, 1 カ月に 1 回か 2 カ月に 1 回集まりヨンシャーっちゃな
いかいな。

(21) 【若 01M】 FUY:今, 僕がそのフクトにね, バイト行きヨーけど, そこで一緒に
やりヨル, その, バイト生がね, 西新の無印によく行くと。

(22) 【若 10F】 NOS:「どっちがブレーキっけ?」とか, 質問しヨッタっちゃん。

(以上, ヨル)

(23) 【高 02M】 UET:ベイサイド, プレイスはやっぱ相当金かけトっちゃけんなんとか,
こう, みんなが集まるようにせないかんね。

(24) 【高 02M】 HIT:そやけん, 案外山やら, 山笠やらに携わっトー子どもたちはし, いい,
いいと思う。

(25) 【若 01M】 HAS:でも鹿児島方言って意外にねー, もう, わりと研究進んどっちゃん
ね。

(26) 【若 03M】 UJK:でなんか今, ニュートンとか出てきトロ?単位で。

(以上, トル)

また, 高年層, 若年層を問わず, 非伝統方言的なテル (例文 (27), (28), (29), (30)) が使用されることがあることも指摘できる。さらに, 若年層にかけてその割合がかなり増えていることもわかる (高年層約 1.9%に対し, 若年層約 7.9%)。

(27) 【高 02M】 HIT:お互いの, 意思が, 本当に, 孫まで伝わっテルかちゅーと, そう
じゃなかもんねー。

(28) 【高 07F】 MAM:やっぱもう同居しテル人は少ないもんね, 今もうね。

(29) 【若 03M】 TOY:どっかで, DJ やっテタって聞いた。

(30) 【若 06F】 INM:もう身なりもしゅっとしテルし, もう, 気, 神経の使い方がこま
やかやしー, なんか, ころっとだまされそうっちゃけどー。

以上 4 節の調査結果から, 高年層における否定形, また, 若年層における肯定形において変

化の過渡的なプロセスが観察されることがわかった。では、なぜそのような使用実態が観察されるのであろうか。続く5節では、否定形における言語変化について考察を行い、補足的に若年層における肯定形の変化についても考えてみることにする。

5. 考察

4節で提示した調査結果から、若年層ではヨラン・トランが用いられなくなり、テナイ専用になるという変化が観察されるということが確認された。5節ではこれをふまえて、福岡市方言のアスペクトマーカにみられる言語変化について考察を行う。

ヨラン・トランからテナイへの変化は若年層において顕著であるが、このような変化は高年層においてすでに始まっていることについては4.1節で述べた。この変化には、肯否の使用頻度と、2.3.2節で述べたヨル／トルの意味的な中和という変化がかかわっているようである。以下、この2点をめぐって、5.1節で肯否の使用頻度について述べた後、5.2節で実際の使用例を細かく観察してみる。その後、5.3節で若年層の用いるテルについても筆者の考えを述べる。

5.1. 肯否の使用頻度

まず、談話を使用した本研究の利点を生かせる肯否の使用頻度について述べる。4節の調査結果からは、肯定形にくらべ否定形の使用そのものが圧倒的に少ないということが指摘できる。肯定形：否定形の割合をみると、高年層においては約10：1、若年層においては約6：1と、アスペクトマーカの使用頻度にははっきりと肯否の非対称性が観察される¹²⁾。

このような肯否の非対称性については、渋谷（1993）が可能表現について考察を行っている。渋谷（1993）によれば、文献（古典語）においても方言においても否定形の方が使用頻度が高く、可能表現が衰退するとき、その使用が否定形に限定されていく（維持される）ことがわかっている。これと同様に福岡市方言のアスペクトマーカについても、使用頻度の高い肯定形に伝統方言形の使用が限定されつつあり、伝統方言形の維持に使用頻度がかかわっていることがわかる。Bybee（2010）は類推による音声変化は使用頻度の高さで抑えられるとしているが（Conserving Effect of high token frequency）、否定形にくらべ肯定形において非伝統方言形のアスペクトマーカの使用が少ないのも、肯定形の使用頻度の高さによってブロックされている部分が少なくないと考えられる。

ただし、テナイの用例数も33例とそれほど多くないことから、使用頻度については否定形のなかでの分析を深めることがむずかしい。そこで、次に実際の使用例について詳しくみていくことで、テナイがどのように侵入していったのかを検討する。

5.2. テナイの侵入のプロセス

続いて、高年層、あるいは若年層において、テナイがどのように用いられるようになったかを、実際の用例を分析しながら進めていく。具体的な作業としては、高年層の用いるテナイ 33 例、若年層の用いるテナイ 111 例に注目し、筆者（1 年間の海外留学を除き、23 歳までを福岡市で過ごした）の内省をもとに、ヨラン／トランとの置換可能性について考えてみる。この置換可能性について考えることで、テナイがヨラン／トランのどちらの意味領域に、どのようなステップで侵入していったのかを明らかにすることができると思われる。

まず、高年層のテナイの置換可能性について検討した結果、33 例中 29 例がトランのみに、4 例がヨランかトランのどちらにも置き換えられるものであった。よって、筆者の内省をとおした観察ではあるが、はっきりとヨランにしか置き換えられないといえる例はなかった。

表 7 高年層のテナイの置換可能性

ヨラン	ヨラン／トラン	トラン	合計
0	4	29	33

(31) 【高 04M】 HAK：それがね、若いときからあの人山笠に出テナカローが。

(32) 【高 05M】 MIK：やけん、2 組は僕がずーっとね、同窓会して行って、全体の、あの 4 クラスの一緒の、同窓会もしたばってんくさ、2 組が一番、名簿ができテナカッテからくさ、あれやったっちゃん。

(33) 【高 07F】 MAM：よかったよね、家燃えテナイのがね、印象やった。

(以上、トランに置換可能)

(34) 【高 03M】 HAM：もう、何代も博多のしょう、川端通りの、商店街の親父さんがきて、こういうのはしテナカッタ。

(35) 【高 06F】 YAC：私は事務系はやっテナイけん。

(36) 【高 06F】 SUC：あとバスなんかそんなに通っテナカッタ。

(以上、ヨランとトランに置換可能)

以上のような分析は、インフォーマントに対して発話意図をフォローアップして確認したわけではないので、あくまで推測の域を出ない。しかしながら、ヨランにしか置き換えられない例がみられないということは、(伝統的にヨランが担う) 動作継続や反復習慣の不成立を表す場合にはテナイは用いられにくいということであろう。このことから、変化の始まりとしてはトランの表していた意味領域(結果継続・経験の不成立)にテナイが侵入したのではないかと考え

られる。では、なぜテナイがトランの意味領域にまず侵入したのであろうか。これについては、ヨランはトランにくらべて意味的に特殊な役割を担っており、テナイではヨランの意味領域をカバーできなかったと考えることはできないであろうか。

たとえばヨランの特殊性は、肯定形ヨルの場合にも認められる。アスペクトの周辺的な用法として、工藤（2004）などにある、

- (37) もうちょっとで車にひかれヨッタ。 <非実現>
 (38) (ネコが魚に近づくのをみて) ネコが魚を食べヨル。 <開始直前>

のような非実現、開始直前とよばれるものや、平塚（2008）に記述のある、

- (39) 昨日地震があつて、台所の食器が全部落ちヨルけんね。

のような「劇的現在」とよばれるものについては、その用法がヨルにしか用意されておらず、ヨルの意味的な特殊性を物語っている。これら周辺的な用法は、テルでは担うことができず、ヨルが使用され続ける必然性があるといえ、同様に否定形においてもヨランの意味領域にテナイが侵入していないことに関与していると思われる¹³⁾。

それでは、トランの意味領域に侵入したテナイは、なぜ若年層においてヨランをも駆逐するようになったのであろうか。若年層の用いるテナイ 111 例についての置換可能性については、表 8 のとおりである。

表 8 若年層のテナイの置換可能性

ヨラン	ヨラン/トラン	トラン	合計
2	2	107	111

このように若年層においては、用例数こそ少ないが、ヨランのカバーする意味領域にもテナイが侵入しているという事実がある。

- (40) 【若 03M】 UJK：お茶代とかとられよろ？とられテナイ？ (= (17))

- (41) 【若 06F】 INM：たとえ会っテナクテも、普段。

(以上、ヨランに置換可能)

- (42) 【若 06F】 INM：それまでずっと取っテナカッタ時期があつてー、やけん、こう、歳の差がおっきんよね、社員の。

(43) 【若 08F】 HAN：うち親，親はね，連絡とってナイけんね。

(以上，ヨランとトランに置換可能)

これについては，2.3.2 節で述べたように，ヨルの意味領域をトルがカバーするようになったという変化がかかわっていると思われる。ここで，高年層と若年層の用いるトルの表す意味についても用例数を確認してみる。

表 9 トルの表す意味

	動作継続	結果継続	経験	反復習慣	合計
高年層	57	444	33	15	549
若年層	89	277	12	15	393

これもまたあくまで筆者の判断による分類にすぎないが，若年層の用いるトル 393 例のうち 89 例は動作継続を表している。一方高年層のトル 549 例のなかでは 57 例しかなく，やはり若年層にかけてヨルが担っていた動作継続をトルが表すようになるという変化は現在も進行中であると考えられる。このような変化は標準語との接触の結果，形式としてはトルという非標準語形を使用しながらも，動作継続／結果継続を表し分けなくなるという変化であると考えられる。このような変化が進んだ結果，ヨルとトルの意味的な対立がなくなってきており，すでに高年層においてトランの意味領域に侵入を開始していたテナイが両者をカバーする存在として若年層において用いられるようになったのではなかろうか。以上のような変化を図示すると，以下の表 10 が得られる。

表 10 トル・テナイの意味領域の拡張

	肯定		否定		
	動作継続	結果継続	動作継続	結果継続	
高年層	ヨル	トル	ヨラン	トラン	テナイ
若年層	ヨル	トル	テナイ		

5.3. 若年層の用いるテルについて

最後に，4.2 節で調査結果を示した若年層のテルについて考えてみる。表 6 でみたように，肯定形におけるテルの使用については，まだヨル・トルの使用の方がかなり優勢である。また，表 4 で示した否定形におけるテナイの場合とは違い，その使用者に偏りがある（TOY と FUN に多い）という特徴もみられる。このように，テルが使用されるようになるという変化についてはまだ始まったばかりであるといえるが，このような変化は，否定形における変化によって

引き起こされたものであると考えられる。否定形においてヨラン・トランが衰退し消滅寸前になり、テナイが使用されることにより、若年層では肯定形ヨル／トルに対し、否定形テナイという不釣り合いな対立ができ上がった。この不釣り合いな対立を解消しようというはたらきから、肯定形にテルが用いられ始めているのではないかと考えられる。もしこのままテルの使用が多くなれば、肯定形テルに対し、否定形テナイという標準語と同じバランスのよい対立が生まれることになるため、否定形における変化が全体の体系にも影響をおよぼしているのではないかとと思われる。

6. まとめと今後の課題

以上、本稿では福岡市方言のAspectマーカにみられる言語変化について、自然談話資料を用いて分析を行った。最後に、本稿で明らかになったことをまとめておく。

- (a) 否定形では若年層において非伝統方言形テナイ専用へと変わりつつあるが、この変化はすでに高年層においても始まっている。また、肯定形では伝統方言形ヨル・トルの使用が多いものの、高年層から若年層にかけて非伝統方言形テルの使用が多くなっている。
- (b) (a) のような変化が引き起こされた要因としては、①肯定形に比べ否定形の使用が圧倒的に少ないことと、②テナイがトランの意味領域に侵入し、取って代わるという変化が起き、さらにヨル／トルの意味対立がなくなってきたところに、テナイが両者をカバーする存在として取って代わるようになったのではないかと考えられる。

本稿では以上のようなことを明らかにしたが、意味的に複雑になるAspectの分析に談話を用いたという点に精度を欠くことは認めざるをえない。今後はこの点を補うべく、面接調査も用いてさらに変化を正確に描きたいと考えている。また、表 10 で示したような変化のプロセスについても、高年層と若年層の間の世代を調査することによって、これが漸次的な変化であることも示す必要があるだろう。加えて、当該方言になぜテナイが侵入してきたのか、また、なぜヨルの意味領域をトルがカバーするようになったのかについても、その理由を考えていかなければならない。

注

- 1) 肯定・非過去の場合、ヨー・トーとなることが多い(木部 2004)。
- 2) 二階堂(2006)は「福岡方言」としているが、インフォーマントは「筑前方言話者」とあり、ほとんどが福岡市で生育しているようである。よって本研究のインフォーマントと地域的な差はほとんどないと考えてよさ

そうである。

- 3) 二階堂 (2006) には用例数の肯否の内訳がはっきりと示されていないが、記述内容から判断すると、それぞれの談話は以下のような用例数であると推測される。

談話 A: ヨル 74 例・トル 87 例・テル 14 例/ヨラン 1 例・トラン 0 例・テナイ 4 例

談話 B: ヨル 19 例・トル 20 例・テル 6 例/ヨラン 0 例・トラン 0 例・テナイ 4 例

談話 C: ヨル 88 例・トル 65 例・テル 5 例/ヨラン 0 例・トラン 2 例・テナイ 5 例

談話 D: ヨル 44 例・トル 43 例・テル 5 例/ヨラン 0 例・トラン 0 例・テナイ 5 例

なお、談話 E はテル 16 例/テナイ 2 例であると思われるが、ヨル/ヨランは合計 86 例、トル/トランは合計 53 例であり、肯否の内訳は不明である。

- 4) 津田氏自身も指摘するところであるが、動詞の否定辞でン・ヘンが優勢な関西若年層方言において、テヘンが用いられなくなり、テナイに置き換わるという現象もある (高木 2006)。
- 5) 非内的限界動詞 (atelic, どこで終わっても、運動が成立したといえる、必然的結果を生じないタイプの動詞) で、「歩く」「遊ぶ」のような、自動詞の場合も、「飲む」「たたく」のような他動詞の場合もある (工藤 2004)。
- 6) 「殺す」「開ける」「壊す」のような、他動詞の内的限界動詞 (telic, そこに至れば必然的に運動が終了し、主体または客体に必然的結果が生じる内的終了限界をもつ動詞) で、客体の側に変化をもたらす主体の動作をとらえている動詞 (工藤 2004)。
- 7) 「死ぬ」「来る」「座る」「開く」のような、自動詞の内的限界動詞で、主体の観点から変化をとらえている動詞 (工藤 2004)。
- 8) このうち【高 03M】の HAM は他のインフォーマントに比べて用例数が極端に少ないが、これは HAM が丁寧体で発話することが多かったことに起因する。(5) で述べた条件にはあてはまるインフォーマントではあるが、調査が意図したデータではないと考えた方がよそさそうである。
- 9) ヨンシャランは敬意を含んでいる。
- 10) このうち、ヨラッシャル (ヨラッシャー)、ヨラッシャッタ、ヨンシャル (ヨンシャー)、ヨンシャッタ、ヨンナル (ヨンナー)、ヨナッタは敬意を含んでいる。
- 11) このうち、トンシャル (トンシャー)、トンシャッテ、トンシャロー、トンシャッタは敬意を含んでいる。
- 12) 注 3 で示した二階堂 (2006) の用例数からも明らかである。
- 13) ただし、周辺の用法であるからか、談話には用例が 1 例もなかった。

参考文献

- 木部暢子 (2004) 「福岡地域のアスペクト・待遇・ムード」工藤真由美 (編) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系——標準語研究を超えて——』 pp.166-186, ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2000) 「アスペクト・テンス体系と極性」『現代日本語研究』7, pp.1-11, 大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座.
- (編) (2004) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系——標準語研究を超えて——』ひつじ書房.
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1.
- 高木千恵 (2006) 「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」『阪大日本語研究』別冊 2, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 津田智史 (2008) 「西日本アスペクト表現の否定形式におけるテナイの考察」『徳島大学国語国文学』21, pp.16-27, 徳島大学国語国文学会.

二階堂整 (2006) 「談話資料からみた福岡方言の aspekto の実態」『語文研究』100・101 合併号, pp.56-66, 九州大学文学部国語国文学会.

平塚雄亮 (2008) 「福岡市方言の aspekto マーカではないヨルの用法について」『阪大社会言語学研究ノート』8, pp.101-115, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

Bybee, J. (2010) *Language, Usage and Cognition*. Cambridge University Press.

(博士後期課程学生)

(2011 年 8 月 19 日受付)

(2011 年 9 月 29 日修正版受付)

(2011 年 11 月 5 日再修正版受付)

(2011 年 11 月 17 日掲載決定)